



桃五だより



No.613

(7月号)

2022.7.1

杉並区立桃井第五小学校

<https://www.suginami-school.ed.jp/momo5shoubg/>

対話的な学びを通して

主幹教諭 上野 和子

桃井第五小学校では、4年前から、「対話的な学びを通して、主体的に多くの他者と関わることができる児童、また、その力を使って学びを深めることのできる児童」の育成をめざして、校内研究をすすめてきました。

① 対話の難しさと楽しさ

保護者のみなさんは、「対話」をどのようなことと考えるでしょうか。誰かと話し合うこと、それとも、自分の考えを相手に分かってもらうことでしょうか。ある本によると、『「対話」は、AとBという異なる二つの論理が摺りあわさり、Cという新しい概念を生み出す。AとBも変わる。まずはじめに、いずれにしても、両者とも変わるのだということを前提にして話を始める。』ということだそうです。

研究を始めるまで、私の思う「対話」は、どちらかという、考えを相手に分かってもらうための取り組みでした。話せばきっと相手は分かってくれる、だから、一生懸命話す。そこに、相手の話から何かを学ぶとか、自分の考えが変わっていくという発想はあまりありませんでした。相手の意見で自分の意見を変えることはちょっと嫌だなとか、なんとなく負けた感じがするという人もいるかもしれません。

対話的な学びを学習場面で積極的に取り入れるようになり、対話に対する考えは大きく変わりました。昨年度末、担任していた6年生に「対話しながら学ぶことのよさ」についてアンケートをとったところ、出てきた意見の多くは、「自分とは違う意見を聞いて、自分の意見をさらに深められる」「違う視点から物事

を見られる」「自分の考えを広げられる」といった内容でした。対話によって自分の考えが変わっていくことを子供たちが「よさ」として感じていたことが分かります。

対話には時間がかかります。スキルも必要です。研究授業を計画する過程では、教員同士が対話を繰り返しますが、それぞれが強い思いをもっている時ほど、「対話の難しさ」をひしひしと感じます。子供のころから対話的に学んできていたら、私たち大人ももう少し上手に対話ができるのかもしれませんが。

② 対話の効果

学年の先生たちとの会話の中で「対話を積極的に取り入れ始めてから、クラスの子供たちの関係性がどんどん良くなってきた気がする」という話になりました。この感覚は、今、桃五小の多くの教員がもっています。今年度、私が受け持っている3年生にとつた「対話をするとうんないいことがあるか」のアンケートでも、圧倒的に多かった答えは「相手を知ることができる」「友達と仲良くなれる」でした。学習場面の対話の活用が6年生ほど多くない3年生は、対話の「人と人とをつなぐ」効果を強く感じているようです。

学校には様々なタイプの子供たちがいます。自分の考えを言うのが苦手な子や、引っ込み思案な子、話すのが苦手な子。それぞれの個性は大切にしながら、必要な場面では、自分がどう思うのかをきちんと伝えられる子、対話を通して関わりながら学び、他者と共に生きられる子になってほしいと考えています。

7月の生活指導目標 気持ちのよいあいさつをしよう

「おはようございます」「いただきます」「ごちそうさま」「さようなら」・・・桃五小ではいつも元気な挨拶が飛び交っています。元気よく挨拶を交わすと自分も相手もよい気持ちになります。これからも桃五小では挨拶運動を推進していきます。ご家庭でもご協力よろしく願いいたします。